



白聖

はくあ 第4号 令和7年5月22日発行



《大学に進学するってどういうこと？》

進路志望調査の結果では、殆どが4年制大学への進学を希望していますが、果たしてどれほどの生徒が「大学に行くこと」を真剣に捉えているのでしょうか。「周りの皆が大学に行くから、何となく…」なんて軽い考えの人もいると思います。今回の進路通信では、大学に行くことについて改めて考えてみたいと思います。

【大学に行くのって何のため？】

大学は、自分で設定したテーマについて研究する場所です。一般教養や第2外国語も広く学びつつ、ゼミなど特有の学び方を通して専門科目を究めていきます。つまり、学問・研究を通して「教養」を身に付ける場所が大学なのです。就職を見据えて資格取得を重視し、スペシャリストを養成する専門学校などとは異なります。変化が激しく予測困難なこれからの時代は、「正解のない問い」に向き合い、自分なりの答えを見つける態度が求められます。深く考え、他者と議論し、多様性と変動に対処しつつ自分の頭で考える思考習慣のベースになるものが「教養」です。長い人生を快適にするスキルを鍛え、人生を生き抜く知恵を身につける場所が大学だと言えるでしょう。

【いい大学＝入試が難しい大学か？】

各大学・学部は「アドミッションポリシー」を定めています。こういう力を身につけ、こういう問題意識を持った学生に入学してほしいという「入学者受け入れ方針」を文書で示したものです。そのうえで、入学者選考試験を課し、学力や適性があると判断した受験生に合格通知を発行するわけです。偏差値や入試の難しさと大学の価値は決まりませんが、大学入試問題は大学からのメッセージ（これぐらいクリアできる学生を入学させたい）だと考えれば、高いハードルを課す大学は、高いレベルの教育・研究をしている矜持をもつ大学であると言えるでしょう。それはカリキュラムポリシー（教育課程の編成）やディプロマポリシー（学位授与の方針）にも表れています。

【受験を考えるのは3年生からでは遅い？】

高校入学の段階で、「本気で全国大会に行きたい」と思って部活動に入部する生徒は、3年間の総決算として相当な覚悟をもって最後の大会に臨みます。3年生になってから全国でも目指してみるかな…と考える部員とは、明らかに意識が違います。大学受験も高校3年間の集大成として臨む場です。「3年生になってから」ではなく、「3年間かけて」自分にとって最高に価値のある場所＝志望校を決めていきましょう。探究学習の延長線上で総合型選抜を目指すにせよ、評定平均値を生かして学校推薦型選抜を目指すにせよ、一般選抜で学力勝負をするにせよ、3年間の日々の積み重ねが、大学入試の結果に反映されます。1年生から高い意識を保って毎日を送ってきた人が有利なのは明らかだと言えます。

【ラクして早く合格できる入試はあるか？】

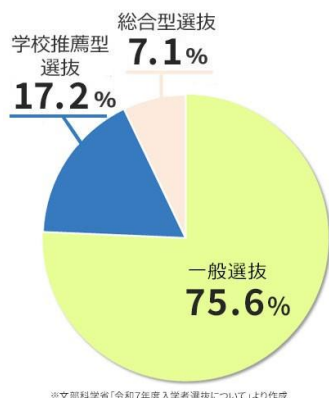
多くの大学では、学校推薦型選抜や総合型選抜において、入学者受け入れ方針に沿った提出書類（志望理由書・活動報告書・学修計画書など）を出願段階で求め、面接・グループワーク・プレゼンテーション・小論文などの様々な試験を組み合わせ、学力だけでなく受験生の意欲・能力・適性を総合的に評価します。多面的な評価が行われるため、決して楽な入試ではありません。学生を集めたいがために形式的な選考方法でたやすく合格を出してしまう大学があるのも事実ですが、果たしてそのような大学は入学後のあなたを満足させてくれるでしょうか。自分の頭で考え、自ら育つ力のある人を見分けるための試験を課す、つまり楽ではない入試を課す大学の方が信用できるのではないのでしょうか。

【旺文社 蛭雪時代より引用・抜粋】

大学入試の種類（学校推薦型選抜・総合型選抜・一般選抜）や、アドミッションポリシーなどの大学が掲げる様々な方針は、時代とともに多様化しています。進路通信では、今号から数回に分けて大学受験や大学のポリシーについて解説していきますので、しっかりと読んで進路選択に役立ててほしいと思います。

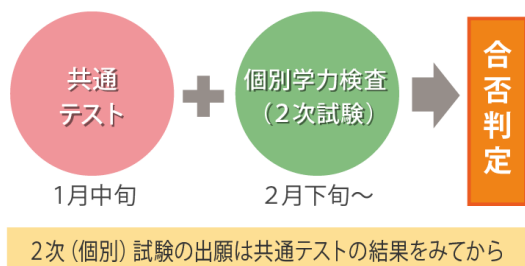
《大学入試について学ぼう①》

大学入試を大きく分けると、一般選抜、学校推薦型選抜、総合型選抜があります。近年、学校推薦型や総合型の募集人員枠が拡大していますが、依然として国公立大学では一般選抜の募集人員枠が全体の約8割近くを占めています。今回は一般選抜について詳しく解説していきます。下の円グラフは2025年度入試の国公立大学の募集人員の割合を入試選抜方法別にみたものです。



【一般選抜とは】

国公立大学の一般選抜では、1次試験的役割を果たす「大学入学共通テスト」の得点と、大学別に実施される「2次試験（個別学力検査）」の得点の合計で合格を判定するケースが一般的です。国公立大学志望者は、1月中旬に実施される共通テストを原則受験しなければなりません。共通テストは2025年度入試より新教科「情報」が加わり、国立大学は6教科8科目を課す場合が多く見られます。受験後は自己採点を行い、その点数をもとに志望する大学を選び願書を提出します。注意したいのが願書の出願期間です。国公立大学の出願期間は、共通テストの約1週間後からスタートし、約10日間となっています。「前期日程」・「後期日程」・「中期日程」の大学を同時に申し込むので、期出願時になって慌てないよう事前に複数の候補を挙げておくことが必要でしょう。

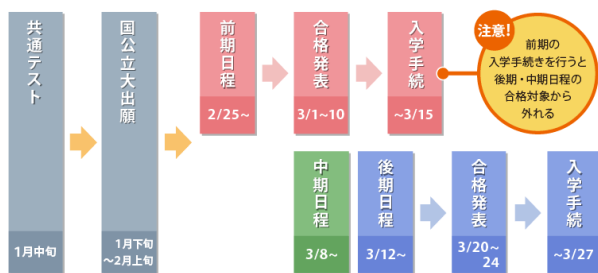


各大学で実施される2次試験（個別学力検査）は2月下旬から行われます。2次試験は「前期日程」・「後期日程」の2つの日程に募集人員を振り分けて選抜する「分

離・分割方式」という制度で実施されます。受験生は前期日程と後期日程にそれぞれ1校ずつ出願できます。同じ大学・学部を2回受験することも、別々の大学・学部を受験することもできます。また、公立大学の一部では「中期日程」や「独自日程」を実施しています。これらをあわせると国公立大学は基本的には最大で3校の受験が可能となります。個別試験の配点や科目ごとの配点は大学・学部等によって異なっています。

	共通テスト	個別学力検査
東京大(理科一類) 【前期】	110点	440点
名古屋大(法学部) 【前期】	950点	600点
神戸大国際人間科学部 (グローバル文化学科) 【前期】	400点	400点

注意が必要なのは前期日程で合格して入学の手続きを行うと、中期日程、後期日程を受験しても、合格の権利を失ってしまうということです。つまり、前期日程合格者は中期日程、後期日程の合格を確認することなく前期日程で受験した大学への入学の判断を迫られます。そのため、第1志望校は前期日程で受験するのがセオリーとなっています。また、前期日程と後期日程の募集人員の割合は8:2と前期日程の割合が非常に高くなっており、近年では後期日程を廃止する大学が増えています。



【Benesse マナビジョンより引用・抜粋】

本校の昨年度の国公立大学一般選抜における合格者総数は115名で、前期日程は91名、後期日程は22名、中期日程は2名でした（学校推薦型選抜は10名、総合型選抜は33名）。そのため、国公立大学合格者総数158名のうち、一般選抜合格者割合は「73%」で、10名中7名以上が一般選抜で合格するという結果でした。全国的にも学校推薦型や総合型での募集定員が増加傾向にありますが、本校ではまだまだ学力勝負の一般選抜が主流になっています。次号では、学校推薦型選抜と総合型選抜の内容について詳しく解説していく予定です。